

愛着と向社会的行動の関係性

—家族と友達に注目して—

上村美結, 米田朱里

Miyu UEMURA, Akari KOMEDA

奈良県立青翔高等学校

【キーワード】 向社会的行動, 愛着, 関係性アプローチ

1. 目的・背景・仮説

日本人は見知らぬ人を助けるという行動をしない。それは、世界から見ても明らかであり、2022年にイギリスの慈善団体(CAF)が公開した「思いやり指数」という指標では日本は119か国中118位と下から二番目である¹⁾。この状況を解決すべく、まず身近な人である友達と家族に対する見返りを求めない人助け(向社会的行動)に注目した。先行研究(尾関ら, 2008)からは地域に対する愛着は地域に対する向社会的行動の促進要因というモデルが確認されている。²⁾これから、本研究では向社会的行動の促進要因として考えられる「愛着」にも注目した。よって、友達への愛着が高い人は友達に対する向社会的行動をよくする、同様に家族への愛着が高い人は家族に対する向社会的行動をよくするという仮説をたて、愛着は向社会的行動の促進要因であるかを明らかにすることにした。

2. 方法

2022年の10月に本校(中学生・高校生)に対して紙に書かれた質問項目に対する回答方法でアンケートを実施した。項目は主に3つで①向社会的行動(村上ら, 2016)³⁾②愛着(諸星ら, 2019)⁴⁾③性別および学年である。①は、対象が家族・友達・見知らぬ人で、例えば対象が見知らぬ人の場合、「見知らぬ人が重そうな荷物を持っているとき、手伝った。」といった質問文となる。同様に②は、対象が友達および家族である。アンケート結果は、R言語で解析を行った。

3. 結果

相関分析の結果、友達への向社会的行動をよくする人は友達に対する愛着が高い人が多い(正の相関がある)とわかった。また友達の場合も正の相関が見られた。また、友達に対する愛着が高い人と低い人の2グループにわけ、向社

会的行動の得点に有意な差があるか検討した(マンホイットニーのU検定より)。結果、有意な差があったことから、愛着が高い人の方が向社会的行動をよくすることがわかった。こちらにも同様に家族の場合でも有意な差が見られた。

4. 考察・展望

山本ら(2021)の結果から、家族や友達への向社会的行動は大事なことで価値のあることがわかっている。⁵⁾よって本研究を含め、愛着は価値決定の一要因であると考えられるため、愛着は向社会的行動の動機の1つであると示唆される。今後の展望として、本研究では対象として扱った友達や家族は自分と親密な関係であり、関係が希薄な対象を取り入れなかったことを踏まえ、今後は友達や家族以外にも同じ学年や同じ部活などを対象とした愛着と向社会的行動の関係性を検討していきたい。

5. 引用文献

- 1) CAF Publications (2022) CAF WORLD GIVING INDEX 2022
- 2) 尾関美喜, 朴賢晶, 中島誠, 吉澤寛之, 原田知佳, 吉田俊和 (2008), 社会環境が子どもの向社会的行動に及ぼす影響, 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要(心理発達科学), 55, 47-55
- 3) 村上達也, 西村多久磨, 櫻井茂男 (2016) 家族、友だち、見知らぬ人に対する向社会的行動, 教育心理学研究, 64, 156-169.
- 4) 諸星真子, 山口一 (2019) 集団(家族・友人・大学・アルバイト先)に対する帰属意識と自尊感情および他受容との関連, 桜美林大学心理学研究, 第10号, 44-58
- 5) 山本 琢俣, 上淵 寿 (2021) 向社会的行動の対象による向社会的動機づけの差異——青年期初期の子どもを対象に, パーソナリティ研究, 30巻, 2号, 86-96